

II. 特別講演

「プロラクチノーマの薬物療法と手術療法」

虎の門病院脳神経外科部長

寺本 明先生

第32回新潟化学療法同好会

日時 平成5年7月17日(土)

午後3時

会場 万代シルバーホテル

一般演題

1) 喀痰の嫌気培養をやり始めて

石橋美由紀・金子 陽子(厚生連中央総合)
吉田真理子・田中 恵子(病院検査室)

喀痰の嫌気培養は一般病院では行われていないのが現状である。当院では、'91年9月中旬より喀痰の嫌気培養をルーチン検査にとり入れ、1年を経過したので、'91年10月より'92年9月までの状況—嫌気培養陽性件数、嫌気性菌分離株状況、同時分離された好気性菌、喀痰性状、グラム染色上の白血球数を検討した。又、明らかに嫌気性菌が起炎菌であったと考えられる症例も合わせて、報告した。

喀痰から分離された嫌気性菌は、口腔常在菌である *P. melaninogenica*, *B. intermedius* が多く検出され、好気性菌との複数分離例が多かった。又、喀痰性状の膿性が強く、白血球が多いほど、陽性率が高い結果であった。

2) *Moraxella* (*Branhamella*) *catarrhalis* の細菌学的検討手塚 宗昭・他(厚生連臨床検査技師会)
微生物研究班・厚生連
中央総合病院検査室

厚生連11病院において平成4年7月12日より9月12日及び平成4年12月より平成5年1月の計4ヶ月間の各種臨床材料より分離された菌株を対象とした。

材料・冬期夏期・年齢別の検出率の比較、分離株ごとに、 β -lactamase 産生性、薬剤感受性および材料由来、年齢、菌量、食食の有無、基礎疾患の有無、感染症名、同時分離菌の有無、また喀痰においては肉眼的性状、グ

ラム染色時における顕微鏡の品質管理も合わせ検討した。

材料・冬期夏期・年齢別・基礎疾患の有無による検出状況、混合感染の状況にまとまった傾向がみられた。全ての株が β -lactamase 産生であったことは注目される。

また、食食像、菌量、喀痰の肉眼的性状および顕微鏡の品質管理を行うことで起炎菌推定の一助と成り得ていると思われた。

3) 血液および血管留置カテーテル分離菌の検討

尾崎 京子・高野 操(新潟大学附属病院)
小柳 典子・関根 昌江(検査部)
和田 光一(同 第二内科)

近年、菌血症の増加の一因として血管留置カテーテルの増加が指摘されている。当院において、1981年より1990年の10年間に実施された血液および血管留置カテーテル培養の分離菌について検討した。また、1988年からの3年間で、血液陽性例の前後一週間に検出されたカテーテル分離菌についても検討した。

10年間に血液培養は12,363件実施され、重複を除き955株分離した。一方、血管留置カテーテルは3,469件培養し、555株分離した。血液からの主な分離菌は、*S. aureus* 131株(13.7%)、うち MRSA 80株)、*P. aeruginosa* 98株(10.3%)、CNS 79株(8.3%)、真菌 153株(16.0%)であった。カテーテルは、CNS 168株(30.3%)、*S. aureus* 85株(15.3%)、うち MRSA 61株)、真菌 139株(25.0%)が主であった。また、1988年からの3年間で血液陽性例のうちカテーテルとの一致は60/269例(22.3%)認められ、菌種では真菌と *S. aureus* が高く、GNR は低かった。

当院では近年、*S. aureus*、CNS、真菌の血液からの分離が増加しているが、カテーテル分離菌もこれらが主であった。菌血症の増加、分離菌の変貌の要因の一つとして、血管留置カテーテルの関与が大きいと考えられた。

4) 白血球遊走阻止試験による薬剤肺炎の検討

宇野 勝次・八木 元広(水原郷病院薬剤科)
鈴木 康稔・関根 理(同 内科)
近藤 有好(国療西新潟病院)
山作房之輔(新潟東保健所)

白血球遊走阻止試験(LMIT)による薬剤肺炎疑診患者の原因薬剤の検出同定を行ない、薬剤肺炎における LMIT